優秀賞

さいこうのたん生日

鹿児島県　日置市立花田小学校三年　徳田　紬樹

　ぼくは、夏休みに九才になりました。たん生日には、家族においわいしてもらうのを、とても楽しみにしていました。それなのに今年は、よんでもないのに、ぼくのたん生日のおいわいをしに台風も来てくれました。たん生日の三日前、お母さんが、

「九日は、台風が近づくそうだから、ケーキをうけとりには、行けそうにないけど、どうする。」

と、聞いてきました。ぼくは、それを聞いて、悲しくて、なみだがこぼれそうになりました。

「どうして、よりによって、ぼくのたん生日に台風がくるんだ。ケーキがないたん生日なんてありえない。」

　ぼくが悲しい顔をしていると、お母さんが、

「九日は、ごちそうだけにして、十日にケーキでおいわいするのは、どう。」

と、ていあんしてくれました。台風がくるのは悲しかったけど、二回おいわいをしてもらうことになり、少し気もちが明るくなりました。

　九日は、朝から雨と風がとても強く、一歩も外に出られそうにはありません。ケーキをとりに行くのは、むりでした。その日の夜のごちそうは、ぼくがリクエストしたお母さんとくせいのみそ汁とからあげでした。とてもおいしかったけど、いつもなら目の前にはケーキがあるはずだったのにな、とちょっとさみしかったです。と、思った時に、とつぜん、パッと電気がきえました。

「えっ、てい電だあ。」

と、ぼくがあわてていると、くらやみの中から、ろうそくの光が見えてきました。そして、

「ハッピーバースデートゥユー。」

と、お兄ちゃんの歌声が聞こえてきました。お兄ちゃんの手には、ケーキらしきものがありました。ぼくは、とてもおどろきました。

「どうしてケーキがあるの。今日は台風で、ケーキをとりに行けなかったはずなのに。」

　テーブルにおかれたのは、真っ白でつやつやとしたパンナコッタでした。パンナコッタの上でろうそくの火がゆらゆらゆれてとてもきれいでした。

「ふうっ。」

　ぼくが火をけすとたくさんのはく手の音がへやの中にひびきわたりました。

　このパンナコッタは、お兄ちゃんが悲しんでいるぼくを見て、サプライズでケーキのかわりに作ってくれたそうです。ぼくは、とってもうれしかったです。お兄ちゃんの心のこもったパンナコッタは、プロの人が作ったどんなケーキよりもおいしかったです。

　さいしょは、台風のせいでさい悪なたん生日になると思っていたけれど、家族のみんなが、わすれられないようなさい高のたん生日にしてくれました。みんなのやさしさがいっぱいつまった、うれしい一日でした。みんなありがとう。